太宰府人物志

資料室だより㉔

◆宗形部刀良

宗形部刀良。これは、大宰府史跡不丁地区官衙域の溝から出土した木簡にみえる兵士の名前です。兵士は一般庶民のなかからほぼ各戸一人の割合で徴発されたと考えられており、彼らは国ごとに数団設置されていた軍団に配属されました。

この木簡には、もうひとり、日下部赤猪という名前もみえます。この日下部も、また先の宗形部も、筑前国ではよくみられるウジ名ですが、木簡の記載からは彼らが確実に筑前国の兵士であるとは言えません。

兵士は、有事勃発の際にその征討に駆り出されることは勿論ですが、平時における守衛もまた重要な職務のひとつでした。つまり一般的にいえば、国府や兵庫などの施設は、その国に設置された軍団兵士によって守護されていたと考えられています。それでは、大宰府、すなわち大宰府政庁やその周辺に存在した諸官衙は誰によって守られていたのでしょうか。この点について本格的な検討をされたのは、現在、九州国立博物館におられる松川博一さんです。

『類聚三代格』弘仁4年（813）8月9日太政官符は、西海道六国の兵士数削減を命じたものですが、そのなかで「府国の吏」、つまり国の役人だけではなく大宰府の役人も兵士を私的に使役していることを指弾しています。松川さんはこのことから、大宰府の役人の配下にも兵士が存在していたと推定しています。さらに冒頭にふれました大宰府史跡不丁地区官衙域の溝から出土した別の木簡にみえる「□□（筑前カ）兵士」「筑後兵士」という記載などをも勘案しつつ、大宰府の諸施設は、管内諸国それも筑前・筑後、肥前・肥後、豊前・豊後のいわゆる三前三後六国の兵士によって守護されていたのではないか、とされていますが、私もその可能性が高いと思います。

さて、いまひとつ西海道にとって、この軍団兵士制とならんで重要な軍事制度が防人制です。実は、西海道の古代軍事制度は、この防人制と軍団兵士制とが互いに絡み合いながら形成されたと考えられます。これが他の地域と大きく相違する点であり、この両者を常に視野に入れて検討することが必要だと思います。

市史資料室　重松　敏彦